宮崎県歴史の道調査報告書

米　良　街　道

1978

宮崎県教育委員会

玖摩往還
（横谷ー村所ー越野尾）

米良往還
（越野尾ー妻ー黒生野ー佐土原）

目　次

1. 米良街道の特色……1
2. 米良街道の歴史……1
3. 米良街道……2
4. 街道沿いの文化財……4
5. 写真及び古地図……1－(1)

序

宮崎県はかっては交通不便の地とされていましたが、近年急速な近代化の波を受け、古来から人や文物の交流の舞台となった道も年々姿を変えています。

その道のもつ歴史的背景、道の果たした役割、道の現状等を明らかにする「歴史の道」調査を、全国にさきがけ、昭和５２年度に県北五街道を実施しました。昨年に引き続き、昭和５３年度は県南四街道の調査を実施し、一昔前の街道や街道沿いの交通遺跡の残存状況の実態を明らかにいたしました。

本報告書は、街道地図・街道の特色・街道の歴史・街道の様子・街道沿いの文化財や遺跡の解説からなっています。

短期間になされた調査ですので不備な点もあろうかと思いますが、本県交通史の研究資料として、又、歴史の道保存のための基礎資料として御活用いただければと思っております。

最後に、資料による事前調査、実地調査、報告書作成と、それぞれお忙しいなかお骨折りいただいた調査員の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和５４年３月

宮崎県教育委員会

教育長　四　本　　茂

例　　言

1. 街　道　名

江戸時代にあっては，道路の規模により街道と往還を使い分けていたようであるが，現在往還は用いないのですべて街道とした。

また，志布志街道をのぞく他の街道は，厳密にいえば2ないし3往還に細区分される。

しかし，すべてをあげる必要もないので，距離も長く中心となるものを代表させた。

2. 街道の概要説明

街道の詳細な記述は，街道沿いの交通関係遺跡の解説に譲り，ここでは街道の持つ歴史的背景，街道の果たした役割，街道の現状等を概括的に記した。

3. 街道沿いの交通関係遺跡解説

(1) 個々の解説の前半に，遺跡及び遺跡周辺の状況，遺跡と遺跡間の状況を過去から現在にわたって述べ，後半に遺跡そのものの解説を付した。

従って個々の解説をとおして読めば，起点から終点迄街道の全容が把握できる。

(2) 街道沿いの主な集落には，戸数，集落間の距離又は起点からの距離を記したが日向地誌によった。地誌は明治8年の調査をもとにしている。

(3) 集落間の距離，起点からの距離で，何里何町と記してあるのは日向地誌によるもので，他は地図から割出した距離であるので正確は期しがたい。一応の目安としていただきたい。

(4) 交通関係遺跡の配列はほぼ道順に沿っているが，間道あり脇道ありで複雑をきわめるので，街道図を参照していただきたい。

1　米良街道の特色

古くは、佐土原城下から米良領との境である尾泊（おどまる）までを〝米良往還〟と称し、尾泊から人吉までを〝球磨往還〟と称していたが、現在はその区別をせず米良街道といっている。

今回の調査では、熊本県との県境である横谷を起点とし、村所、小川、越野尾、尾泊を経て佐土原（大手門前）に至る１７里（約６８Km）を米良街道として調査の対象とした。

当時の米良は、現在の西米良村と西都市に編入された東米良とをあわせた地域で、そのほとんどは一ツ瀬川の上流域である。

米良の山中を発した流れは、その両岸を浸食して粘板岩の切り立つ崖とし、激流岩をかむ川は次第に水量を増し平野へ下ってくる。そのため川沿いの道は通しにくく、米良街道は尾根から尾根の山道が中心となる。

山の天気は変りやすく、雨が降れば雨をさけるため木立ちの中の道をとり、崖道がすべればまわり道をし、その時々により道をかえた。昔の人々は、自然にさからわず歩ける所を歩くので到達点は同じでも、その間の道は網の目のように無数に存在するわけで、昔の米良街道は人一人がやっと通れる曲りくねった山道であった。

この米良街道も、近年、新道にとって代られた。新道は河川に沿った平坦な自道車道である。従って尾根道を下った地点、即ち谷合いの地で旧道と一致することはあっても、大半は別ルートである。

新道の建設により、旧道はその機能を失いもとの山野にかえりつつあるというのが現状である。

2　米良街道の歴史

江戸時代、人吉から米良を通り佐土原に至るには、人吉領、米良領（人吉領付属地）、佐土原領を通った。この中で米良領を治めた米良氏は、徳川との関係が深く、交代寄合（譜代大名待遇）に列せられた領主である。人吉藩に従属して５年に一度参勤交代をした。又、米良氏は銀鏡、村所、銀鏡と居館を交互に代えていたが、第十代則重公より代々主膳と称し小川に本拠を置いた。

米良氏と徳川家とのつながりを証明するものとして、「徳川家康黒印状」（写）がある。

米良山之儀　如前々　鷹巣山被　仰付候
然者　彼巣山へ弓鉄炮一切不可入候・・・

この書状により、鷹狩り用の鷹が将軍家へ献上されたことが推察される。献上の一行は人吉への道をとったか、佐土原への道をとったか不明であるが、何れにせよ米良街道を通ったことだけは確かである。

他に、当時の交通事情を知る資料として、「佐土原藩島津日誌」がある。

- 延宝９年（１６８１）１２月１９日
  相良遠江守殿ヨリ為歳暮之御祝儀御状幷
  羚羊（かもしか）　粕漬一桶到来・・・
  球磨帰之飛脚弓削弥七兵衛帰着従遠江守殿
  鳥目百疋被下之
- 文化３年（１８０６）　１月２日
  米良主膳殿江年始ニ付飛札差遣之
  米良主膳殿より年始ニ付飛脚到来之右飛脚江
  両度之町料理差出之

この日誌により険阻な山道を行く米良街道も参勤交代の出発や帰着の知らせ、年始年末の挨拶、冠婚葬祭の連絡等を告げる飛脚が往来していたことがわかる。

又、米良街道の記録として、「伊能忠敬測量日誌」。勤王家高山彦九郎の「米良遊歴日記」がある。

伊能忠敬は文化9年（1812）　測量しながらこの街道を通過している。又、高山彦九郎は、寛政4年（1792）　人吉からは日向入りしている。二人とも横谷、板屋、村所、小川、越野尾、尾泊と同じ道を辿っている。

3　米　良　街　道

(1)　横谷から村所へ

人吉を出て湯の前、そして猪鹿倉（いかぐら）、ここから東へ向って山路を登ると約4Kmで人吉と米良境の横谷①に着く。ここには明治の初め人家が5軒あった。

新道は伊鹿倉からつづら折りの長い坂道となり横谷で旧道と出会う。新道と旧道が重なる部分は約100mである。

旧道は右におれて山に入り一里山越の山路になる。一里山峠②（1096m）を越すには、高さにして500m程登らねばならない。

「大木倒れて苔むして有り、木々にはかずらがすきまなく巻き深山の有様」

と、高山彦九郎は述べている。

峠路を下ると上板屋で、ここから道は現在須木から下板屋への国道265号線と一緒になる。板屋③では、湯の前から測量を始めた伊能忠敬の測量班が一泊している。

旧道は鶴瀬④で横谷からの国道219号線とT字型に交わる。鶴瀬から深瀬⑤までは国道と重なる。

伊能忠敬は、「川幅18間　竹橋にて深瀬と言う甚だ危き橋なり」　高山彦九郎は、「川を左へ二つ渡る　深瀬という」と、それぞれ当地のことについてふれている。

深瀬から村所間は、旧道は板谷川の左岸、国道は右岸を通っている。この間の様子を、平部嶠南は「処々岩腹をうがちて道を通す。危機（橋）多し　牛馬通行難し」　高山彦九郎は、「岨道の嶮　なる所　木など打渡し桟として過ぐる所二ケ所を経る。村所に及んで十五間斗り板の桟を経て村所人家三十軒斗り、板屋より二里東へ来る」と述べている。

村所⑥は、現在西米良村の中心地で、かって米良氏の居館が置かれた所である。横谷、村所間に立ちはだかる一里山越は牛馬通行困難な道であり、人吉との物資の交流は主として人の背によった。

(2)　村所から小川へ

村所と鶴村をつなぐ橋である百間橋⑦を渡ると、道は小川に向う天包越（あまつつみ）⑪と、椎葉へ向う道に分岐する。天包越の道は西米良村の役場前からすぐ坂道である。高さにして600m余り登ると峠に高塚稲荷神社⑫がある。この天包越は西南の役で戦いに破れた佐土原隊の古戦場でもある。天包山の頂付近に露出した巨大な岩肌に今も弾痕が残るという。旧道は鹿の足跡があるほどの険しい峠道ではあるが、無理をすれば今でも通れる。

伊能忠敬の測量日誌によると、湯の前から板屋まで3里31町、板屋から小川まで3里27町、あわせて7里22町（約30Km）でこの距離は昔の人の1日行程であった。高山彦九郎は、湯の前を朝8時頃出発し小川に夜の8時頃に着いている。旅馴れた彼が12時間もかかったのであるからかなり険しい道といえる。

(3)　小川から越野尾へ

小川⑬から越野尾まで県道は小川川の右岸を通っている。旧道も小川沿いの道であったが、

現在一ツ瀬ダムのため大半は水中に没している。当時の旧道は崖の裾を縫うように進み、所々に架かる激流の中の一本橋を西側へ渡り、又、東側へ渡りながら川沿いの道を下って行った。

高山彦九郎は、このような難路を4斗米2俵を妻から八重まで担い来たという男の話を聞いて不審としている。

越野尾⑲は、明治の初め人家が8戸ほどあった。ここは小川川と村所からの一ツ瀬川（米良川）の合流点で数百mほど下流に越野尾の独木橋⑳が架っていた。

高山彦九郎はここでも、「米良川巾二十七間、川中大岩へ一本橋を渡したるを四つ渡る。浪音烈しく淵深し、動きてあぶなし。

見へ渡る柴のあみはしめをあらみ
そこいもなみのおとそ恐ろし」

と、和歌をまじえ感想を述べている。

丸木の一本橋では、渡る途中激流に目がくらみ踏みはずして転落する者があろうかと、丸木の両側に竹柴を打ちつけ流れが見えぬように工夫されたが、それでも危なかったようである。

小川から越野尾橋までは2里（約8Km）の道程である。

尾泊より荷を積んだ馬が越野尾の独木橋に着くと、ここで荷を下ろし、馬子がその荷を背負って橋を渡った。空荷の馬は別の場所で川を渡し、また荷を積みかえた。当時の物資の輸送はこの繰返しであったようである。

橋を渡ると道は尾泊行きと、児原稲荷㉑行きの道にわかれる。児原稲荷に参詣した者の中には、ここから国見山の峠を通り、佐土原藩三財の寒川に出て佐土原城下に行く者もあり、又、その反対もあった。佐土原からの児原参りにはよく利用されたという。ここより東へ約4Km行くと礫石（されい）に至る。

現在の越野尾の集落は一ツ瀬ダムの建設により水底に沈む土地の人達が、移住して出来たもので過去の越野尾は50mの水底に眠っている。

(4) 越野尾から尾泊へ

礫石（されい）もまた越野尾同様新しい集落である。ここから旧道は急坂となり、坂を登ると峠から越野尾や小川が一望に見える。峠を下ると上片内（かみかたうち）への道と尾泊への道との分岐点があり、タブの大木の下に小さな石祠がある。この中に祀られたお大師様㉔に当時の人達は心から旅の安全を念じたことだろう。

平地に近づきつつあるといっても、まだこのあたりの街道は馬一頭に荷を積んでやっと通れる程の道幅であり、夏になると道わきの草がのびて、その草をかきわけかきわけ通ったようである。

尾泊は全く山の中の集落で越野尾から2里12町（約9.2Km）の地である。ここは佐土原領と米良領との境で、交通の要所であった。常時5～6頭の馬がいて運輸に供されており、宿駅の感を呈したらしい。店や宿屋もあり、伊能忠敬の測量班もここで宿泊している。

現在、本陣らしい家一軒と半壊の家が一軒残り、後は何軒かの屋敷跡と畑地が残るだけの無人の村と化している。

(5) 尾泊から佐土原へ

尾泊から長谷観音までの道は屋根伝いの山道で、眼下に一ツ瀬川に沿って蛇行する国道を見ることが出来る。

尾泊㉕から約5Kmで猿囲（さるのかこい）㉖で、ここも尾泊同様交通の要所であったが今は無人である。再び約5Kmで椿原㉗で、更に約5Kmで笹の元、何れの地も集落があり、茶屋等があったようである。ほぼ等間隔に形成されたこれら集落

は現在すべて無人の里となっている。

この山道は天正5年（1577）　島津氏に破れた伊東一族が、豊後の大友宗麟を頼って落ちのびる逃避行の道でもあり、途中伊東義祐が鎧をぬいでかけたという鎧松、自ら命を絶った女達の霊を弔う姫塚等の遺跡がある。㉘

姫塚のある笹ノ元は、三納を経て佐土原へ至る道（佐土原領内を通る道）と、杉安、妻を経て佐土原へ至る道（天領を通る道）との分岐点である。なお、現在、尾泊と笹ノ元間の旧道は大半が営林署の林道として利用されているので、車で行くことができる唯一の自然道である。道は旧道の匂を色濃く残した平坦道でいかにも自然道らしい。

㋑　三納を経由して佐土原へ至る道

笹ノ元から約800 mで長谷観音㉙の境内に入る。米良街道は初瀬山長谷寺の山門を出入することになる。山門から山道を下ると、やっと平坦地となり長谷の集落に出る。これより南へ500 m行くと三納の麓㉚であるが、米良に対する押さえとして三納衆がこの地に住まった。ここから札の元（ふだもと）を経て平郡（へぐり）へは約2Kmである。

三財川を渡り鹿野田・巨田へと至る道はほとんど現在の道と同じである。春田を通って大小路町（本町二丁目）に入ると間もなく大手門前㊹であるが、ここは米良街道の終点であり起点である。

㋺　杉安を経由して佐土原へ至る道

一方、笹ノ元から佐土原へ至る道は山道を杉安へと下る。ここは名勝杉安峡を控えた地であり、近くに享保年間（1722～）児玉久右衛門が築いた杉安堰㊱がある。ここから南方（みなみかた）を通り都万（つま）神社㊳に出る。

「社より南二町斗り桜の並木、先月二十日頃盛りにて今は葉桜のみ」こう記した高山彦九郎は、都万神社から桜馬場を通り妻本町㊴へ入っている。ここは、幕領の中の佐土原藩の飛地であるが、当時この地方の商業活動の中心地であった。

本町を出ると幕領右松である。道は園元、赤池、今井、四日市、黒生野、別府、花下、柳瀬、現王渡しと続くが、だいたい国道219号線に沿う道である。

現王渡し㊷（三納渡しともいう）より東南へ約800 m行くと、幕領と佐土原領境の現王口に達する。現王口についての記述は日向地誌にも見え、「現王口石橋、米良往還に属す。現王口溝に架す長さ一間半巾五尺」と記されている。

ここから南へ約200 m行くと大小路町2丁目の角に出る。五日町角より西へ100 mの所が佐土原城大手門前である。

4　街道沿いの文化財

西米良村

①　横谷峠　㊲

熊本と宮崎の県境にあり、標高600 m、九州山地の真只中に位置している。肥後から日向へ入る米良街道（球磨往還）の入口にあたる。

高山彦九郎日記によると、「猪鹿倉（湯の前）あたりより東南の方へ登ること十丁横谷と号す、家三軒、川流るゝ相良領米良領の堺地、流れを以って境とす」とある。

現在の国道219号線とは全くちがう。

人吉方面の眺めはよいが、旧道はこの峠からすぐ米良の深山へと入っている。この峠には今でも数軒の家がある。

② 一里山峠

横谷峠から又すぐ登りになっており、板屋まで3里余り（約１２～１３Km）。

途中に一里山峠（標高１０９６m）があり木々などおい茂り大変な難所である。

峠付近は少し平になっており「茶湯」という休けい場所があった。市房山（標高１７２２m）は北東の方に見える，

このあたりから下り坂となるが、この坂を「板谷の前坂」という。

③ 板谷 ㊟

旧道は一里山越をして坂を下りてくると板谷である。人家は上板谷に４～５軒、下板谷に８～９軒ほどあったといわれる。

高山彦九郎によると「川を左に見て岨道を過ぐ」とあるから、旧道も八重川にそった今の道とほぼ同じ所を通って板谷橋のところに出てくるのである。

板谷は茶の木が多かったと、高山彦九郎は言っている。

④ 鶴瀬の橋

板谷から川に沿って国道２１９号線に出合った付近を鶴瀬という。現在ここには板谷橋が架かっているが、旧道の時代は丸木の一本橋を渡り崖の下や川筋を通って深瀬へ向っている。

現在の国道２１９号線は横谷峠から板谷川の右岸を通ってきてこの鶴瀬で出合っている。

⑤ 深瀬の橋

深瀬は鶴瀬から板谷川を左右に数度渡り、崖っぷちを約１Km下ったところである。この付近は、あちこちによどんだいわゆる「曲り淵」がみられる。深瀬には竹橋がかけられていたが大変危い橋だったらしい。

この他、板谷川には随所に丸太を打渡した一本橋などが架かり、一里山越えが山越えの難所であるのに対し、深瀬、村所間は川越えの難所であった。

⑥ 村所 ㊟

板谷川と一ツ瀬川（米良川）の合流点が、交通の要所村所である。古くは鶴村と村所村とからなり人家は合わせて６０軒ぐらいであった。米良領主の館もここにおかれたことがあり、西米良の中心的役割を昔から果たしている。

⑦ 百間橋

深瀬、平瀬を通り板谷川の左岸を下ってくると村所の発電所に出てくる。そこから板谷川の右岸に渡り小山を越えると一ツ瀬川（米良川）で、かっては「百間橋」といわれる橋が架かっていた。長さ約４５間（約８０m）、幅3間（約5.4m）で割木を並べたものであり、渡ると中ほどでは動揺が激しく危かったようである。

現在の橋より約１０m上流に当時の橋の痕跡がわずかながらみられる。

⑧ 菊池記念館

村所は米良領主菊池氏の所領であり、一時はここに館も置かれた。維新後の藩籍奉還に際しては、菊池氏は所領の山地、山林を領民に分け与えたといわれる。

これに感激した村民は、昭和８年（１９３３）米良菊池別邸を建設し菊池氏に贈った。これが現在の菊池記念館である。役場から上米良の方へ少し行ったところにある。

⑨　村所八幡神社　㊞

役場のすぐ上、町を見おろす高台にある。旧道は役場の左端にある石段をのぼりなかほどに立つ鳥居をくぐって左手に向っている。

この八幡神社は文明３年（１４７１）　４代領主重鑑（しげかね）公が宇佐に請うて創立したもので、県指定の神面が所蔵されている。例祭は１２月１８日に行われ村内一のにぎわいをみせる。

⑩　村所の菊池氏の墓　㊞

八幡神社境内裏手に米良領主や奥方の墓がある。ここには４代領主重鑑公ほか数人の領主や奥方が葬られている。

旧道はこの墓地から面株（めんかぶ）へ向い、天包山越えの坂道となる。

⑪　天包山　㊞

村所から小川への道はこの天包山を越えることになる。

天包山（標高１１８９m）は米良三山の一つで、村所から東方約４Kmのところにある。旧道は、この山頂の少し下を通っている。

この山は明治１０年（１８７７）　西南の役のときの古戦場でもあり、びょうぶ岩にはその時の弾痕が今も残っている。山の中腹では焼畑が今も見られる。

⑫　高塚稲荷神社

天包山越えの峠に赤い鳥居の高塚稲荷神社がある。標高９００m、九州山地の山々が波打っており遠くは霧島山も望むことができる。

社は小さいが古くから祀られており村民の信仰も厚い。神社のうしろの岩場には天の逆鉾が祀られており山伏の修験場と思えるところがある。

旧道は、この神社の鳥居のところで曲がり小川へと下っている。

⑬　小川　㊞

小川は一ツ瀬川の支流、小川川の上流に位置している。まわりを山々に囲まれた米良としては比較的広い盆地である。水田がよく開けており人家もかなり見られる。

江戸中期頃より明治維新までの約２００年間米良領主が居城を構え小川は米良の政治、文化の中心地であった。

旧道もここを通っており、天包山を越えると坊主荘におりてきて小川橋を渡り城の下を通って小川川伝いに越野尾へと向っている。

⑭　小川城跡　㊞

小川城は米良領主菊池氏の居城で１０代則重公のときから明治維新の則忠公まで続いた。現在は小川小、中学校となっている。

山をけずりとったような敷地内に本邸のほか、不動院や藩士の子弟を教育した弘文館などが近くにあった。

城の麓を十文字といい、旧道はこの付近を通っていたので十文字往還ともいわれていた。

⑮　小川民俗資料館　㊞

小川、小中学校の敷地内にある。過疎化で余裕のできた校舎（約８４.７m^2）を資料館に改造したものである。

校区内の家庭にあった衣・食・住に関する用具、生産用具、運搬具などの民俗資料を展示している。

なかでも明治時代のカメラ、及び当時の西米良の様子を撮影した写真の数々は見ものである。

⑯　米良領主の墓

小川には領主の墓地が二ケ所ある。囲墓地で城跡右手の少し高い集落の中にあり、則信公。則元公、則順公が埋葬されている。もう一ケ所は城の西にあたる沢水墓地で、１０代則重公、則純公、栄叙公が埋葬されている。

米良領主の墓地は、小川の他、銀鏡、村所にもある。旧道はこの二つの墓地の間を通っている。

⑰　小川川　㊟

小川・越野尾間の旧道は小川川（一ツ瀬川の支流）を左右に幾度となく渡っている。この間約８Kmで、滝あり、淵あり、一本橋ありと相当な難所続きである。高山彦九郎日記にも、「岨道の嶮なるを行きて橋多し、丸木横たへて橋としたる所多し」と記されている。

旧道は小川の坊主荘付近から左岸へ御隠居所から右岸の釈加堂へ、欄干橋（小川橋）を渡って十文字、流合（はき）、鈴原（すずばる）は左岸、出穴（でわな）からまた右岸、今別府でまた左岸、浜御前（はまごぜ）でまた右岸に渡って越野尾へ向っている。

⑱　米良神社

小川城の下手、旧道の右の方にある神社である。昔は市野宮神社といい、大山祇命と磐長姫の二神を祀った。菊池氏が米良に入山し小川に居城してから、この神社を米良全山の氏神として祭るようになった。２００年前、則信公のとき社を造営し米良神社とした。今でも米良の人々の信仰の厚い神社である。

⑲　越野尾

本流の一ツ瀬川と支流の小川川の出合ったところが越野尾である。現在は一ツ瀬ダムができて、昔の面影を見ることは全然できない。近代的な橋がいくつもかかっており、旧道は湖底に沈んでいる。小川から来た旧道はこの越野尾から一ツ瀬川に下り橋を渡って坂道を登り尾泊へと向っている。児原稲荷神社へは途中から右手へ行くことになる。

⑳　越野尾橋

越野尾には「柴のあみ橋」といって、米良独特の橋が一ツ瀬川に架けられていた。長さ約３５ｍで一本橋の両側に竹が２本結わいつけられたものである。これは水しぶきよけ、渡る人の危険を少しでもやわらげるためのものであるが、橋が長いため中程では横揺れをするなどやはり恐ろしい橋であった。しかし、これが本道であったため必ずこの橋を渡ったのである。馬は渡れないので荷物をおろして早瀬を渡した。今はすべて５０ｍの水底にあり跡形もない

㉑　児原稲荷神社　㊟

この神社は越野尾を見おろす標高６００ｍ一ツ瀬川右岸の山頂にある。火明命、大山祇命、木花咲耶姫の三神が祭神である。米良領主もよく参拝され、また佐土原藩主からも美しい絵馬が送られるなどして、領主や藩主から崇敬されていたようである。旧道からは離れているが、一般の参拝者も多かったようである。維新の際社号が消滅し、明治１５年（１８８２）児原稲荷と改称された。以来、五穀豊穣、商売繁盛を祈願する参拝者が今も絶えない。

㉒　甲斐右膳父子の墓

児原稲荷神社の社殿に上る石段の右側に墓地がある。高山彦九郎の日記に、「稲荷鳥居の傍に墓並べり奇怪といふべし、地の狭きか故かと覚ゆ」とあるが、ここに甲斐右膳、大

蔵父子の墓がある。

甲斐父子はこの社家の出であり、米良主膳の家臣で幕末に勤王の志士として活躍したが、幕命で捕えられ元治元年（１８６４）６月に父、８月に子が人吉の獄中で歿した。

㉓　領境杉の本

礫石（されい）は越野尾の「柴のあみ橋」を渡って約４Kmの一ツ瀬川右岸の地名である。地名のとおり小石が多く、ここからまた急な山坂となっていて、峠が杉の本である。ここは米良領と佐土原領の境で児原から約８Kmのところである。

西　都　市

㉔　片内の大師像 ㊟

街道は上片内を経て三叉路に至る。三叉路中央のタブの古木の下の石祠に、お大師様が祀られている。記銘はないが台座の石に描かれた線画の徳利と盃がほほえましい。

ここからは眼下に一ツ瀬ダム国道２１９号線がのぞめる。

㉕　尾泊（おどまる） ㊟

佐土原、尾泊間を尾泊往還という。尾泊が米良への玄関口であった。当時は店や宿屋などがあってにぎわい、物資の交換がさかんに行われていた所である。現在廃屋が２軒あるだけである。なお、尾泊、人吉間は球磨往還といっていた。

尾泊にはいつも数頭の馬がおり、米良方面への物資輸送がおこなわれていたようである。

㉖　猿囲（さるのかこい） ㊟

猿囲は標高４３０ ｍで一ツ瀬川を眼下に見下ろす位置にあり、地元の人たちは、「さんのかえ」といっている。現在無人であるが、明治の頃までは小学校、郵便局、宿屋などもあって、尾泊と同様に米良街道の要所だった。

この先は椿茶屋、久保の茶屋といった地名が残り、旧道の存在を示してくれる。

㉗　椿原峠

椿原峠は標高５００ｍ である。天正５年（１５７７）伊東氏の豊後落ちのとき一行はここで休んだ。伊東三位入道の鎧をかけたという「よろい松」があったが、今はもうない。

㉘　姫塚 ㊟

旧道の下を営林署の林道が通されたが、その時姫塚は現在地に移された。大師像、茶屋塔、庚申待、八十八ケ所塔の四基が草むらの中に立つ。伊東氏の豊後落ちの際、ついて行けぬ女達の何人かがここで自害した。姫塚は土地の者があわれんで築いた塚である。この塚の石塔の粉を恋しい人にふりかけると想いがかなうといつの頃からか言うようになった。

この姫塚から、杉安道と三納道に分岐する。

㉙　長谷観音 ㊟

姫塚から三納への道をとると、約８００ｍで長谷観音の大きな堂が見えてくる。初瀬山長谷寺は大永２年（１５２２）　焼失した。その後伊東尹祐が再興し、新たに１１面観世音菩薩（像高７ｍ）と聖観世音菩薩（像高５ｍ）及び勢至菩薩を祀ったといわれるが、今は１１面観音の頭部のみ残る。

街道はこの境内を通って三納の札ノ元へと向う。

㉚　麓

長谷寺から坂道を約４Km下ると三納の麓に達する。さらに三納の札ノ元を通ると佐土原である。

麓は佐土原城の外城の役を果たし三納衆といわれる武士集団が配置され、馬場、弓場、衆溜がおかれていた。米良に対する押さえとしてであった。

㉛ 根本寺

麓より約４Kmで平郡（へぐり）に達す。西都と三財を結ぶ道との交差点の１００ｍ程手前北側に根本寺がある。天保年間に廃寺になっており、現在木造の阿弥陀如来像（像高約３ｍ）を祀る祠堂を残すのみである。

㉜ 潮神社 ㊟

平郡から東に進み三財川を渡ると鹿野田に達する。途中、彦火火出見尊を祀る潮神社が街道右側にある。境内に塩水のわき出る井戸があり、潮の干満に従って水量が増減するので、その底は海まで続いていると信じられ潮満の玉の伝説を残す。

神社の西２００ｍの所に泉式部の墓と称し、自然石を祀る祠堂と薬師様がある。昔は病気治ゆを願う者が訪れたことであろう。

佐土原町

㉝ 巨田神社 ㊟ （国指定）

潮神社より山裾道を東へ２Km程進むと、街道の右側に鳥居がたつ。この鳥居は佐土原七社の一つ、巨田神社のものである。本殿は三間社流造で天文１９年（１５５０） の建築で、室町時代の神社建築としては県内唯一のもので、昭和５３年国の重要文化財に指定された。

㉞ 鴨越 ㊟

巨田神社の近くに神池である巨田池があるが、池の北側丘陵に鴨越と称する鴨の猟場がある。ここでの猟法は樹木を切り倒して鴨の通る道を作り、三角網で捕えるというもので４００年の伝統をもつ。

㉟ 高月院

巨田神社鳥居から約１Kmで堤の集落に入る。ここも三納の麓と同様、郷士が多く住んだ。堤を抜けると左側にもと幕領の現王島が溝一つへだてて見えてくる。

道は西春田（鴫之口）の道路と交差する。同じく武士の屋敷地である。左折すれば大小路（本町通）を通って大手門へ向う。この地点より直進すれば鴫之口衆溜の前を経てお城へ続く道となる。

高月院は島津氏の菩提寺で歴代の藩主の墓がある。

西都市

㊱ 杉安堰

一方妻を経て佐土原へ至る道は杉安道である。笹の元の姫塚から杉安までの道は下り坂の道で約３Kmである。杉安で国道２１９号線と合するがここからは平坦地を行く道となる。杉安は一ツ瀬川に面する集落で、杉安峡下流に享保７年（１７２２） 児玉久右衛門が築いた杉安堰がある。水の取水口の近くには、久右衛門の胸像及び顕彰碑等が立つ。

㊲ 南方神社

杉安から田の中の道を約２Km南東に進むと南方神社に着く。島ノ内は島津藩領と秋月藩領の間に割込んでいる幕領の中心地で、穂北紙の産地として知られた。

南方神社の境内には、楠の巨木がそびえ穂

北の鎮守として崇拝された。ここは、尾泊から約１２Kmの地である。

㊳　都万神社　㊞

南方から約３Kmで妻である。妻は国府跡、国分寺跡、国分尼寺跡があり古代日向の中心地である。都万神社の門前町として栄えた妻本町は天領穂北の中の佐土原藩飛地で、この地方の経済の中心であった。

都万神社は、日向国式内社４座の一つで、木花咲耶姫を祭神とし、藩から３１５石を給されていた。

㊴　妻本町　㊞

妻本町は、都万神社から東にのびる本通りだけの町である。江戸時代、町は町別当、町年寄、町方の役人で治められ、藩からも役人が派遣されていた。

㊵　金丸堰

妻本町を出ると右松に至るが、途中、街道右手に宗光寺、左手に羽黒神社がある。右松の次は園元であるが、園元、赤池両地区の水田用水として一ツ瀬に築かれた井堰が金丸堰である。

㊶　金丸惣八屋敷

園元から赤池、今井、四日市、黒生野、花下と南下すると柳瀬である。柳瀬には、先の金丸堰を築いた金丸惣八の屋敷がある。

金丸惣八は堰を築いた他、溜池等もつくり、佐土原藩治水の第一人者であった。

㊷　現王渡　㊞

黒生野から約３Kmで現王渡に着く。この渡しは、三納渡、中島渡とも呼ばれ伊能忠敬の測量日誌には、「御料所現王島村　三納川船渡し巾二十四間」と記されている。

現王島の集落に入ると、ここには山王神社があり神武天皇の産衣を埋めたという伝説を残す。

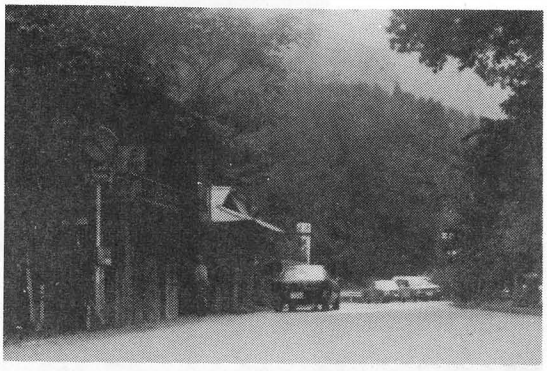
㊸　西明寺

現王渡から東南へ約９００mで、西明寺前に出る。西明寺は禅宗で都於郡大中寺の末寺であり、現在は地蔵堂が残る。西明寺から東南に進むと現王口である。現王口は幕領と佐土原藩との出入口で長さ１間半巾５尺の石橋が架かっていたが、現在、橋はない。現王口から大小路町に出ると、鹿野田から来た米良街道（三納道）と一緒になる。

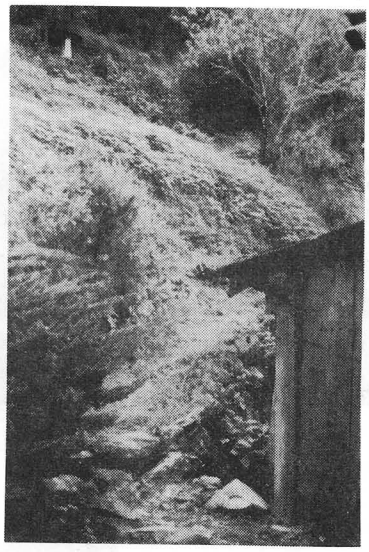
佐土原町

㊹　大手門前

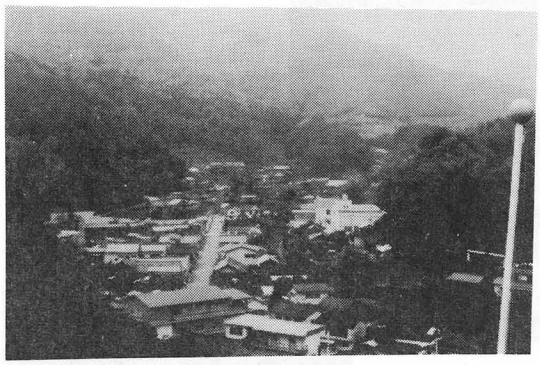
大小路町から五日町へ、大手門は五日間角より西へ約１００mで、米良街道の終点である。



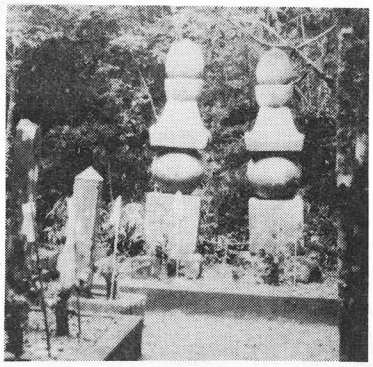
①横谷峠
米良街道の入口で、標高６００ｍ、九州山地の真只中にある。



③板谷
一里山越をして坂を下ると板谷である。

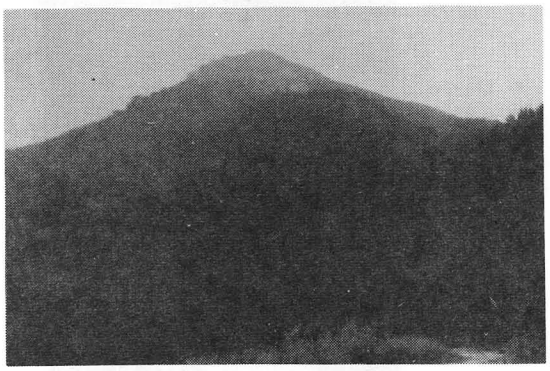


⑥村所
昔から西米良の中心的役割を果たす。



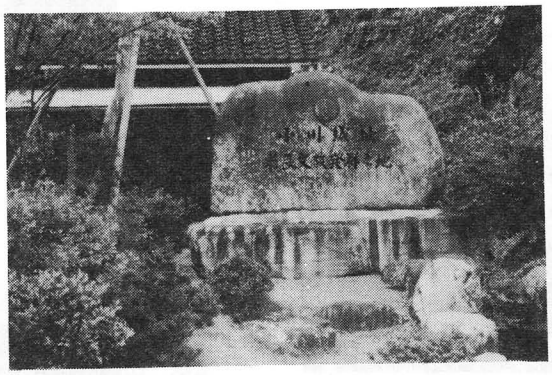
⑩村所の菊池氏の墓
４代領主重鑑公ほかが葬られている。

⑨村所八幡神社
県指定の神面が所蔵されている。

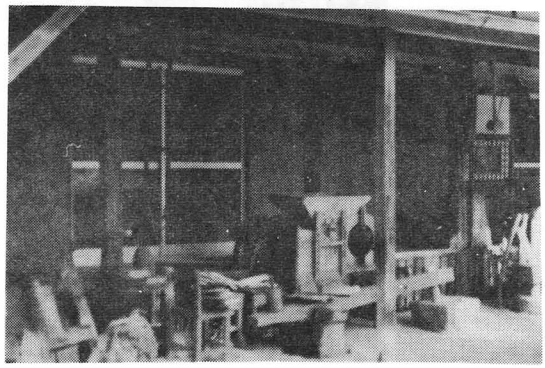


⑪天包山
標高1,189ｍで米良三山の一つである。

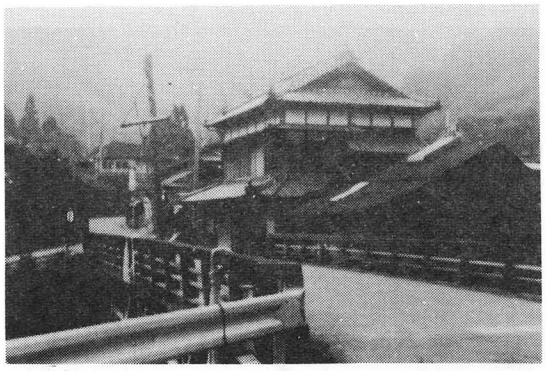
⑬小川
米良領主の居城があり、米良の政治・文化の中心地であつた。



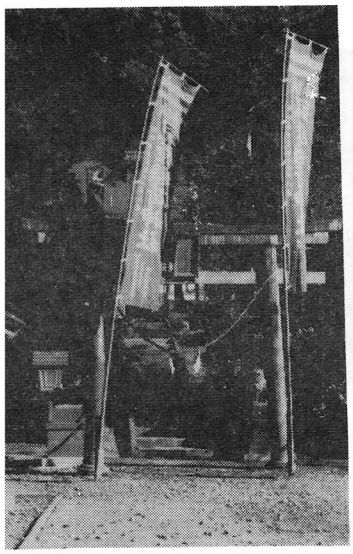
⑭小川城跡
米良領主菊池氏の居城であった。



⑮小川民俗資料館

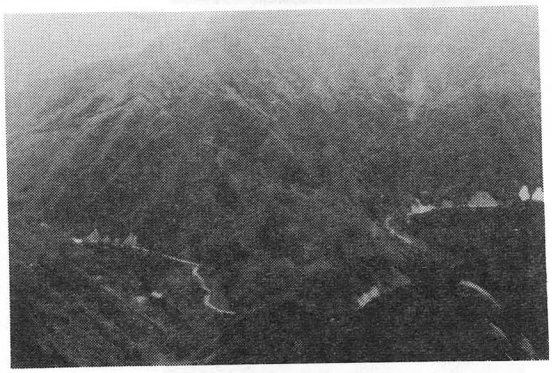


⑰小川川
旧道は小川川を左右に幾度となく渡る。

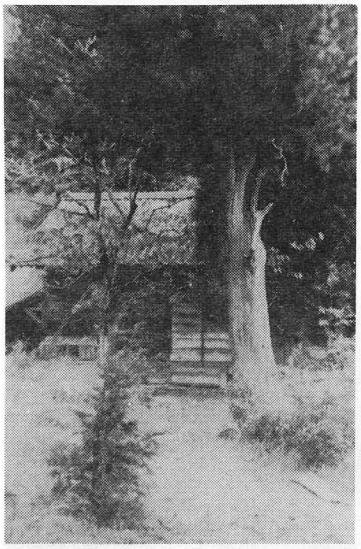


㉑児原稲荷神社
　米良領主もよく参拝されたという。

㉔片内の大師像
　旅人が山道の安全を祈った。

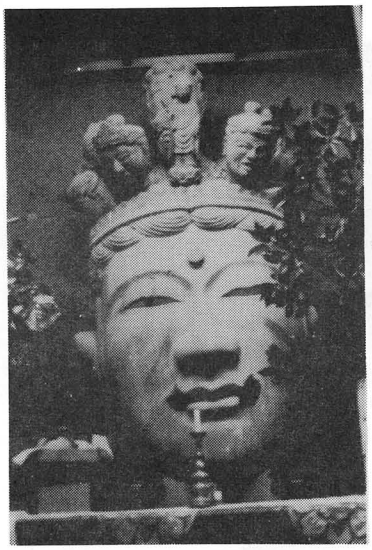


㉖猿囲
　標高４３０ｍ、米良街道の要所だった。

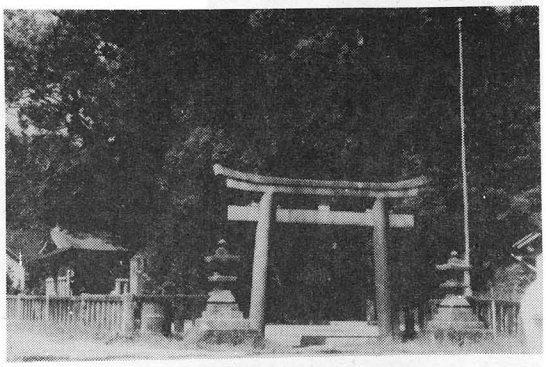


㉕尾泊
　米良への玄関口で、当時は店や宿屋があった。

㉘姫塚
　この石塔の粉を恋しい人にふりかけると、想いがかなうという。

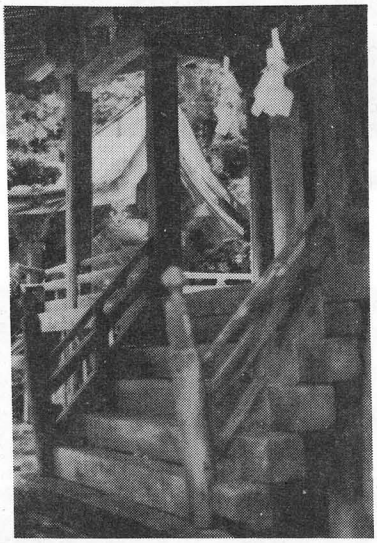


㉙長谷観音
今は仏像の頭部のみが残る。



㉜ 潮神社
潮満の玉の伝説を残す潮神社

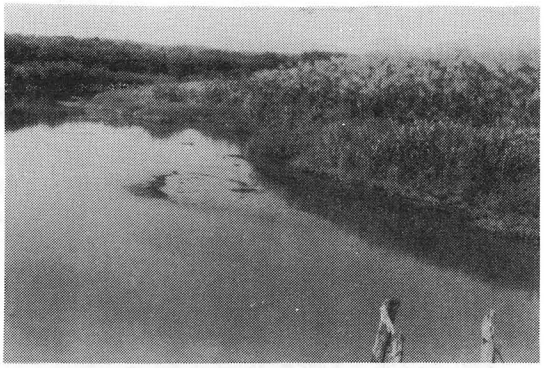
㉞鴨越
４００年の伝統をもつ鴨猟の池



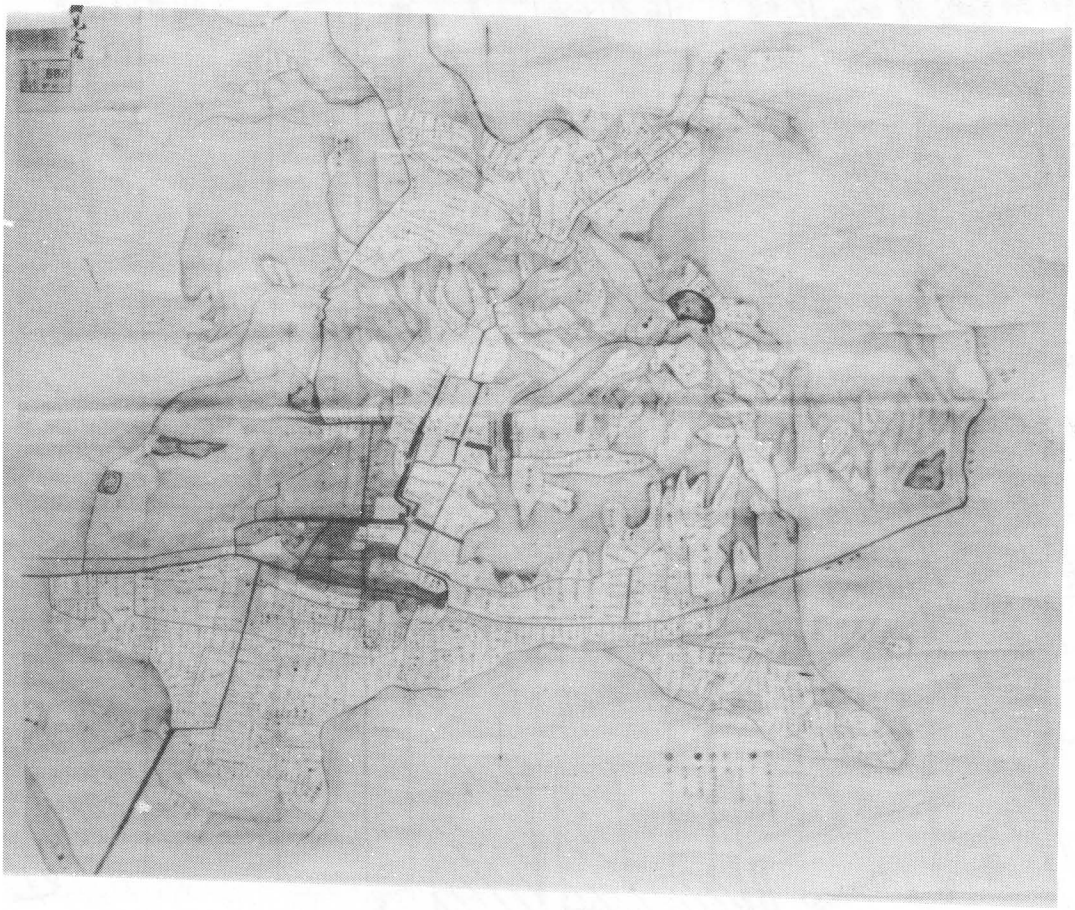
㉝ 巨田神社
佐土原七社の一つ、室町時代の神社建築としては県内唯一。

㊳都万神社
妻本町はこの神社の門前町として栄えた。

㊴ 妻本町
妻は古代日向の中心地であり、本町はこの地方の経済の中心であった。

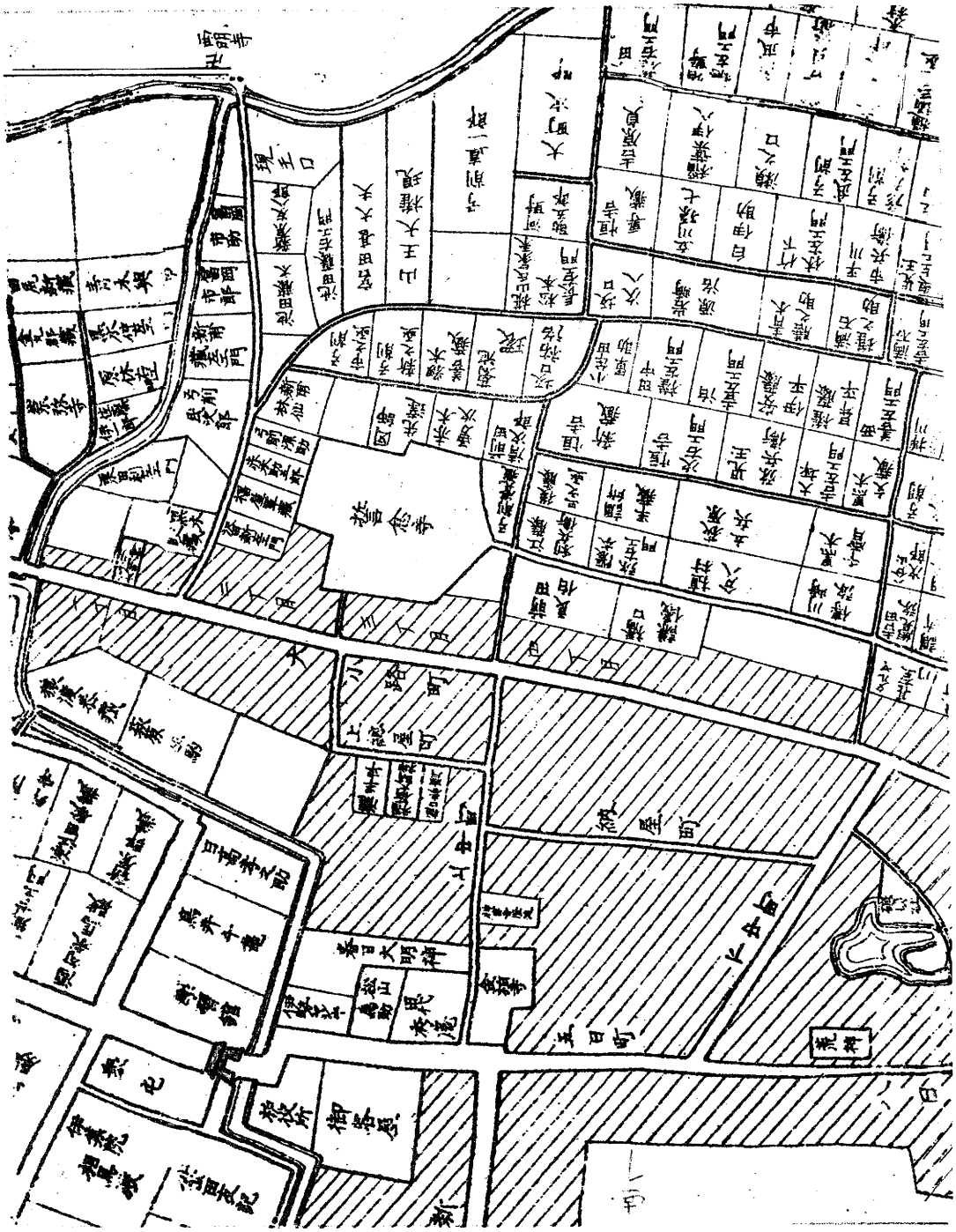


㊷ 現王渡
中島渡とも呼ばれ、当時は巾約43.6mあった。



佐土原城下見取図

佐土原城
大手門付近見取図



○ 監　　修　　石 川 恒太郎　　県文化財保護審議会委員

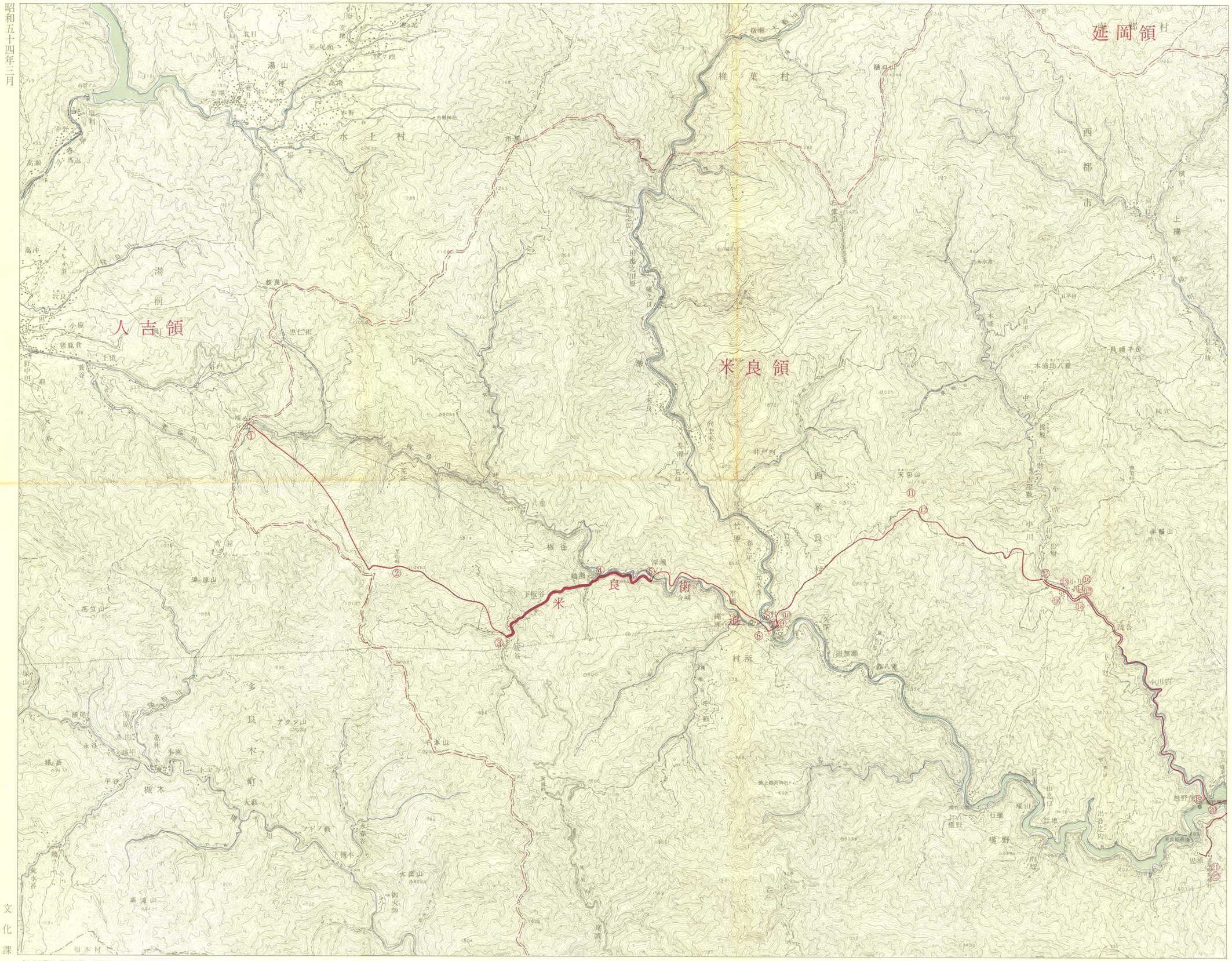
○ 調　査　員

街道名	氏名	役職
米良街道	青山幹雄	県文化財保護指導委員
	安藤徳英	妻北小学校教諭
飫肥街道	久枝　敏	県文化財保護指導委員
	川崎満也	北郷小学校教諭
鵜戸街道	細田隆介	県文化財保護指導委員
	堀内和雄	油津小学校教諭
志布志街道	前田博仁	大平小学校教諭
	井手義徳	有明小学校教諭

「歴史の道」調査報告書
昭和54年3月31日
編　集　　宮崎県教育委員会
発　行　　文　化　課
宮崎市橘通東1丁目9番10号
印刷所　　酒　匂　印　刷

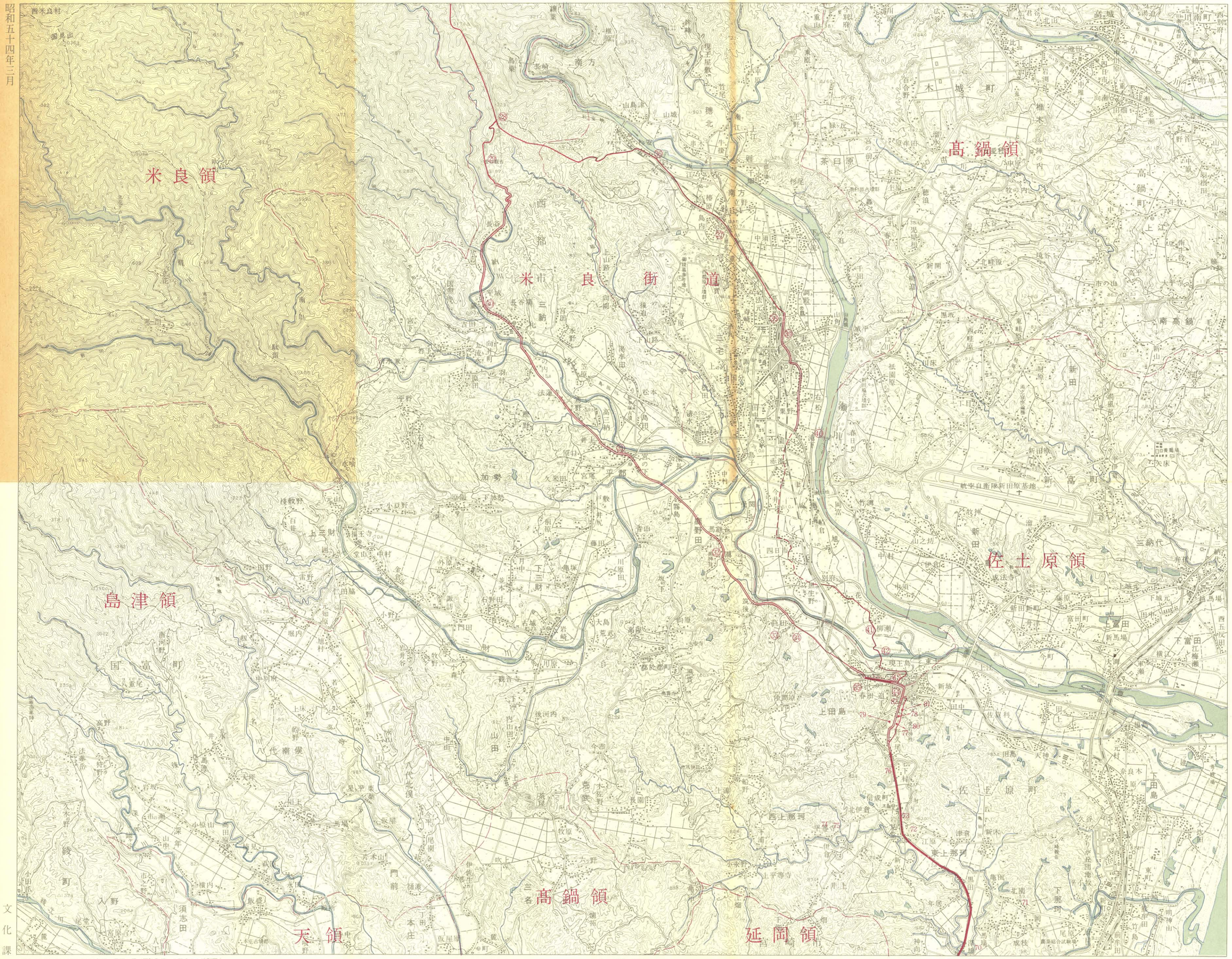
村　所

昭和五十四年三月


延岡領
人吉領
米良領
米良街道
村所
椎葉村
水上村
湯前町
西都市
木城町
高千穂町
諸塚村
椎葉村
横瀬
板谷
深瀬
竹原
乃木良
合崎
田無瀬
森久瀬
小川内
越野尾
横野
出口
妙見
天包山
赤幡山
高鼻山
千本山
花立山
湯之原山
高瀬
高千穂
横平
上場
木浦
本浦助六畑
長幡子番
中ノ
横瀬
上三博
吉隆敷
中川
平川
平
西
米
良
村
石堂山
樋口山
椎葉
稲荷山
横瀬

妻

昭和五十四年三月



文化課

「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の5万分の1地形図を、複製したものである。（承認番号）昭54 九複第 116 号」

作製 宮崎市橘通西5丁目6-38 ☎(0985)27-4068 (有)富士マイクロサービスセンター

尾鈴山

昭和五十四年三月

宮崎県歴史の道

米良街道
㉓ 領堺杉の本
㉔ 片内の大師像
㉕ 尾泊
㉖ 猿囲
㉗ 椿原峠

凡例

- 国道
- 県道
- その他の道
- 不明部分
- 領界

記号

- 幅員11.0m以上の道路
- 幅員5.5m～11.0mの道路
- 幅員2.5m～5.5mの道路
- 幅員1.5m～2.5mの道路
- 幅員1.5m未満の道路
- 国道および路線番号
- 自動車通行困難の部
- 建設中の道路
- 有料道路および料金徴収所
- 国有鉄道
- 民営鉄道
- 地下鉄および地下式鉄道
- 森林鉄道等
- 路面の鉄道
- 索道
- 国有鉄道・民営鉄道 建設中または運行休止中
- 橋および高架部
- 切取部
- 盛土部
- 送電線
- 石段
- 都・府・県界
- 北海道の支庁界
- 都・市界、東京都の区界
- 町・村界、指定都市の区界
- 土地の利用景の界
- △526 三角点
- ▲247 水準点
- ·124 標石のあるもの
- ·125 標石のないもの
- 標高点

- 市役所（東京都の区役所）
- 町・村役場（指定都市の区役所）
- 官公署（特定の記号のないもの）
- 裁判所
- 税務署
- 営林署
- 測候所
- 警察署
- 駐在所・派出所
- 消防署
- 保健所
- 郵便局
- 電報・電話局
- 自衛隊
- 工場
- 発電所・変電所
- 小・中学校
- 高等学校
- 大学・高専
- 病院
- 神社
- 寺院
- 高塔
- 記念碑
- 煙突
- 電波塔
- 油井・ガス井
- 灯台
- 坑口・洞口
- 城跡
- 史跡・名勝・天然記念物
- 噴火口・噴気口
- 温泉・鉱泉
- 採鉱地
- 採石地
- 重要港
- 地方港
- 漁港

田		広葉樹林	
畑・牧草地		針葉樹林	
果樹園		はいまつ地	
桑畑		竹林	
茶畑		しの地	
その他の樹木畑		しゅろ科樹林	
		荒地	

1：50,000

0 1000 2000 3000 4000 5000m

「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の5万分の1地形図を、複製したものである。（承認番号）昭54 九複第116号」

作製 宮崎市橘通西5丁目6-39 ☎(0985)27-4068 (株)富士マイクロサービスセンター